

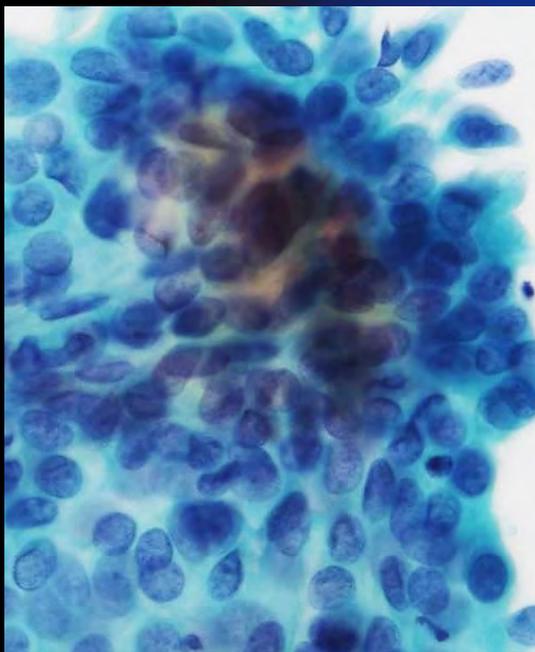
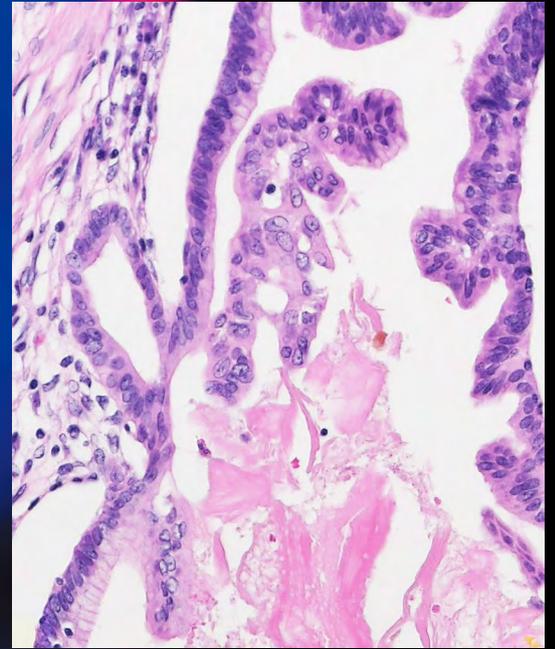
ONLINE ISSN 1882-7233  
PRINT ISSN 0387-1193

日臨細胞誌  
J.Jpn.Soc.Clin.Cytol.

第59卷 第1号 令和2年1月

# 日本臨床細胞学会雑誌

THE JOURNAL  
OF THE JAPANESE  
SOCIETY OF CLINICAL  
CYTOLOGY



公益社団法人  
日本臨床細胞学会

<http://www.jscc.or.jp/>

**Vol.59 No.**

**Jan. 2020**

**1**

目次

巻頭言.....川本 雅司

〈原 著〉

胆管擦過細胞診における5-アミノレブリン酸蛍光染色を用いた光力学的診断併用の有用性  
.....労働者健康安全機構大阪労災病院中央検査部 三村 明弘・他 (1)

〈症 例〉

膵癌との鑑別が問題となった慢性膵炎の1例  
.....JA 広島厚生連尾道総合病院病理研究検査科 佐々木健司・他 (7)

〈特 集〉 本邦における「唾液腺細胞診ミラノシステム」の実際の運用と問題点  
特集によせて  
.....沖縄協同病院病理診断科 樋口佳代子・他 (12)

唾液腺細胞診ミラノシステムの概要の解説  
.....沖縄協同病院病理診断科 樋口佳代子・他 (13)

唾液腺穿刺吸引細胞診の国際報告様式ミラノシステムの実際の運用における有用性  
.....成田富里徳洲会病院病理診断科 加藤 拓・他 (18)

唾液腺領域の穿刺吸引細胞診におけるミラノシステムを用いた後方視的な検討  
.....久留米大学病院病理診断科・病理部 秋葉 純・他 (24)

当施設におけるミラノシステムを用いた唾液腺細胞診の検討とその有用性  
.....藤田医科大学医学部病理診断学講座 浦野 誠・他 (30)

唾液腺細胞診断におけるミラノシステムの有用性——当院における前向き検証——  
.....九州大学病院病理診断科・病理部 野上美和子・他 (38)

投稿規定.....(47)

ヘルシンキ宣言.....(54)

人を対象とする医学系研究に関する倫理指針.....(58)

編集委員会.....(81)

＊

〈表紙写真〉

膵癌との鑑別が問題となった慢性膵炎

(左：パパニコロウ染色，右：H-E 染色) (佐々木健司・他，左：Photo. 4, 9頁，右：Photo. 8, 10頁)

## CONTENTS

Editorial.....Masashi Kawamoto

### *Original Article*

Utility of photodynamic diagnosis using 5-aminolevulinic acid fluorescent staining in biliary tract cytology  
Akihiro Mimura, et al. (Dept. of Lab. Med., Worker Health and Safety Org. Osaka Rosai Hosp., Osaka) .....( 1 )

### *Clinical Article*

A case of chronic pancreatitis caused by differential diagnosis of pancreatic cancer  
Kenji Sasaki, et al. (Dept. of Path., JA Onomichi General Hosp., Hiroshima) .....( 7 )

*Special Articles* The Milan System for Reporting Salivary Gland Cytopathology—Practical approach and problems in Japanese institutions—

Introduction of the Milan System for Reporting Salivary Gland Cytopathology (MSRSGC)  
Kayoko Higuchi, et al. (Section of Surg. Path., Okinawa Kyodo Hosp., Okinawa) .....( 13 )

Usefulness in application of the Milan System for Reporting Salivary Gland Cytopathology  
Taku Kato, et al. (Div. of Path., Naritatomisato Tokushukai Hosp., Chiba) .....( 18 )

A retrospective analysis of fine needle aspiration findings in the salivary gland region using the Milan System  
for Reporting Salivary Gland Cytopathology  
Jun Akiba, et al. (Dept. of Diag. Path., Kurume Univ. Hosp., Fukuoka) .....( 24 )

Application and Utility of the Milan System for Reporting Salivary Gland Cytopathology in our institution  
Makoto Urano, et al. (Dept. of Diag. Path., Fujita Health Univ., School of Med., Aichi) .....( 30 )

Diagnostic utility of the Milan System for Reporting Salivary Gland Cytopathology—A prospective study—  
Miwako Nogami, et al. (Div. of Diag. Path., Kyushu Univ. Hosp., Fukuoka) .....( 38 )

Notice to contributors.....( 47 )

### *Cover Photo*

Chronic pancreatitis caused by differential diagnosis of pancreatic cancer  
(Left : Pap. stain, Right : H-E stain) (Kenji Sakaki, et al., Left : Photo. 4, p9, Right : Photo. 8, p10)



## 巻頭言

Masashi Kawamoto

# 川本雅司

公益社団法人日本臨床細胞学会副理事長  
帝京大学医学部附属溝口病院病理診断科

### ▶ 昭和，平成，そして令和へ



令和という元号になり初めての新年を迎え，ここに新年号をお届けできることを喜ばしく思います。

振り返れば1959年（昭和34年），東京細胞診研究会が活動を開始し，その2年後に発足した婦人科細胞学談話会と合同で1961年（昭和36年）7月に開催されたのが，本学会の第1回学術集会とされています（石川正臣学会長，増淵一正世話人）。では，本会誌はといえば，学会発足の翌年である1962年（昭和37年）に創刊号が世に出，平成を越えて令和へと，ついに3つの時代を跨いで，新年号は「第59巻第1号」となります。そして59巻に達した本会誌は則ち日本における細胞診・臨床細胞学の学問的エビデンスであり，細胞診の濫觴からゲノム時代へと時代を経てきた医療・医学の歴史でもあります。

では，現代の本会誌はゲノムや記号，グラフだらけなのかということ……，形態好きの私としてはうれしいほど細胞の写真が満載です。生命そのものが神秘であることは令和になっても変わりませんが，生命を構築する細胞，組織の美しさは自然や宇宙の美しさと同様で，畏怖の念に打たれます。そのような細胞を畏怖だけの対象から，科学的に読み解こうとするのが我々ではないでしょうか。自然災害を防ごうと努力するのと同様に，私たちは病気を阻止，予防しようとして努力しているともいえるかもしれません。そして，その努力，謎解きのヒントが生まれた時に，本会誌は日本語でも発表でき，かつその知見を日本語でも読むことができるという優れた利点を有しています。新知見は経験を積んだものだけに与えられる特権ではありません。もちろん，何が新知見であるのかを見極めるためには経験と知識が必要ですが，以前（昭和!?!）と違い，インターネット等を介した情報のおかげで，初学者であっても短時間のうちに，自分が目の前にしているものが新知見であるのか否かを検索することができるようになりました。経験に頼っていた比率の多い自分が，「ほう～ そんなことがまだ報告されていないんだ」などと，PCの画面や若い同僚から教えられることも珍しくなくなったように思います（有効に使えば，ネットは経験値の差をゼロ近くまで縮めてくれるものではないでしょうか）。さて，そうやって新知見を得たのなら，それを開示・公開することが進歩への貢献となります。学術集会での発表は，その一つで



## 巻頭言

すが、折角の新知見、もうちょっとの努力で半永久的に残る資料となるのが論文です。そう、ほんのちょっとの努力で論文化できるのが本会誌（その努力とは、投稿規定にあわせた文献の記載法など、基本的なことだけかもしれません。それは共著者にもしっかりチェックしてもらってなど、投稿者の最低限の義務を果たすことで実現できてしまいます）。なかには、学術集会や研究会での発表は苦手だけど、論文ならば喋らなくてもいいので、という人もいるかもしれません。そんなときも気軽に本会誌に投稿をしてみてください。もちろん、英語でも構いません（ただし投稿規定は厳密に守ってくださいね！）。

「こんなことがわかってきました」「こんな症例がありました」と、本学会を起し本会誌を発刊、継続してくださった先輩方にお示しできるように、（かつ気軽に）（たくさん）の論文を載せていくことを、公益社団法人日本臨床細胞学会会員は令和新年の誓いといたしましょう。

さて、新年号はどんな新しいことが載っているのでしょうか。胸をふくらませてページをめくって（スクロールして）みましょう。

## 日本臨床細胞学会雑誌投稿規定

## 1. 投稿資格

原則として投稿者は共著者も含め日本臨床細胞学会会員に限る。ただし、画像診断、治療などに直接関わった医師(2名以内)はこの限りではない。

## 2. 掲載論文

- 1) 論文の種別は総説, 原著, 調査報告, 症例報告, 特集, 短報, 読者の声である。
- 2) 投稿論文は臨床細胞学の進歩に寄与しうるもので, 他誌に発表されていないものに限る。
- 3) 論文作成に際しては, プライバシー保護の観点も含め, ヘルシンキ宣言(ヒトにおける biomedical 研究に携わる医師のための勧告)ならびに人を対象とする医学系研究に関する倫理指針(文部科学省, 厚生労働省(平成26年12月22日, 平成29年2月28日一部改正))が遵守されていること。  
※これらの指針は, 学会誌1号に記載。
- 4) 論文の著作権は本学会に帰属し, 著者は当学会による電子公開を承諾するものとする。セルフ・アーカイブ(自身のホームページ, 所属機関のリポジトリなど)においては表題, 所属, 著者名, 内容抄録の公開は学会誌の発行の後に認められる。
- 5) 論文投稿に際し, 著者全員の利益相反自己申告書(様式2)を添付すること。なお, 書式は <http://jscc.or.jp/coi/> からダウンロードし用いる。この様式2の内容は論文末尾, 文献の直前の場所に記される。規定された利益相反状態がない場合は, 同部分に, 「筆者らは, 開示すべき利益相反状態はありません。」などの文言を入れる。

## 3. 投稿形式

- 1) 原則として“電子投稿”とする。
- 2) 電子投稿の際には, 以下のサイトからアクセスする。  
<https://www.editorialmanager.com/jscc/>

## 4. 執筆要項

- 1) 文章と文体
  - (1) 用語は和文または英文とする。
  - (2) 平仮名, 常用漢字, 現代仮名づかいを用いる。ただし, 固有名詞や一般に用いられている学術用語はその限りではない。英文での投稿原稿の場合も和文の

場合に準ずる。

- (3) 度量衡単位は cm, mm,  $\mu\text{m}$ ,  $\text{cm}^2$ , ml, l, g, mg など CGS 単位を用いる。
  - (4) 外国人名, 適当な和名のない薬品名, 器具および機械名, または疾患名, 学術的表現, 科学用語については原語を用いる。大文字は固有名詞およびドイツ語の名詞の頭文字に限る。
  - (5) 医学用語は日本臨床細胞学会編集の「細胞診用語解説集」に準拠すること。また, その略語を用いても良いが, はじめに完全な用語を書き, 以下に略語を用いることを明らかにする。
- 2) 原稿の書き方(電子投稿でない場合)
 

原稿はワープロを用い, A4 判縦に横書きし, 1行25字で20行を1枚におさめる。上下左右に30mm程度の余白をとり, 左揃えとする。文字は12ポイント相当以上を用いるのが望ましい。
  - 3) 電子ファイル
 

以下の電子ファイル形式を推奨する。  
Word, WordPerfect, RTF, TXT, LaTeX2e (英文のみ), AMSTeX, TIFF, GIF, JPEG, EPS, Postscript, PICT, PDF, Excel, PowerPoint。

なお, 写真の解像度は, 雑誌掲載サイズで300dpi以上が目安である。
  - 4) 総説・原著・調査報告・症例報告・短報論文の様式

## (1) 構成

タイトルページ, 内容抄録, 索引用語(key words), 本文, 利益相反状態の開示, 英文抄録, 文献, 写真, 図, 表の順とする。原稿には通し頁番号をふる。タイトルページ(1枚目)には, 当該論文における修正稿回数(初回, 修正1など), 論文の種別(原著, 症例報告, 短報など), 和文の表題(50字以内), 著者名, 所属のほか論文別刷請求先, 著作権の移譲と早期公開に対する同意を明記する。

2枚目には内容抄録, 索引用語を記載する。本文は内容抄録とは別に始める。

## (2) 著者

著者名は直接研究に携わった者のみに限定する。著者数は以下のとおりとし, それ以外の関係者は本文末に謝辞として表記されたい。

原著: 12名以内

調査報告：10名以内  
 症例報告：10名以内  
 短報：6名以内  
 総説：1名を原則とする

## (3) 内容抄録

短報を除いて500字以内にまとめ、以下のような小見出しをつける。

原著と調査報告：目的、方法、成績、結論  
 症例報告：背景、症例、結論  
 総説と特集：論文の内容に応じて適宜設定

## (4) 索引用語

論文の内容を暗示する英語の単語 (Key words) を5語以内で表示する。原則として、第1語は対象、第2語は方法、第3語以下は内容を暗示する単語とする。

key words 例：

胆嚢穿刺吸引細胞診—胆嚢癌4例の細胞像と組織像—

Gallbladder, Aspiration, Cancer, Morphology  
 肝細胞癌についての1考察

Hepatocellular carcinoma, Morphology, Review  
 喀痰中に卵巣明細胞腺癌細胞が見出されたまれな1例

Clear cell adenocarcinoma, Cytology, Sputum,  
 Metastasis, Case report

## (5) 本文および枚数制限

## a. 原著・総説・調査報告

本文、文献を含め10,000字以内 (A4判20頁) とする。

図・表 (写真を含まず) は、10枚以内とする。  
 写真の枚数に制限はないが、必要最少限の枚数とする。

## b. 症例報告

本文、文献を含め6,000字以内 (A4判12頁以内) とする。

図・表 (写真を含まず) は、5枚以内とする。  
 写真の枚数に制限はないが、必要最少限の枚数とする。

## c. 短報

出来上がり2頁以内とする。

写真は2枚以内 (組み合わせは各々2枚以内)、  
 図表は計1枚までとする。

写真2枚と図表1枚が入った場合の本文 (I. はじめに～) と文献は1,500字程度 (A4判3頁) を目安とする。

## (6) 英文抄録

本文とは別紙に、表題の英訳およびローマ字つづりの著者名、所属の英文名、および抄録内容を記す。著者名のあとに、以下の略号を用いてそれぞれの称号あるいは資格を付記する。

医師：M. D., M. D., M. I. A. C., M. D., F. I. A. C.

歯科医師：D. D. S. とし、それ以外の称号あるいは資格は医師と同様に付記する。

臨床検査技師：M. T., C. T., J. S. C., C. T., I. A. C., C. T., C. M. I. A. C., C. T., C. F. I. A. C.などを記載する。  
 抄録内容は英語で200語以内 (ただし表題、著者名、所属名はのぞく) とし、以下のような小見出しをつけてまとめる。

原著と調査報告：Objective, Study Design, Results, Conclusion

症例報告：Background, Case (または Cases), Conclusion

総説：論文の内容に応じて適宜設定

短報：小見出しをつけずに100語以内にまとめる

## (7) 文献

## a. 主要のものに限る。

原著・特集・調査報告：30編以内

症例報告：15編以内

短報：5編以内

総説：特に編数の制限を定めない

## b. 引用順にならべ、本文中に肩付き番号を付す。

## c. 文献表記はバンクーバー・スタイルとし、誌名略記について和文文献は医学中央雑誌刊行会、英文文献はIndex Medicusに準ずる。参考として以下に例を記載する。

## 【雑誌の場合】

著者名 (和名はフルネームで、欧文名は姓のみをフルスペル、その他はイニシャルのみで6名まで表記し、6名をこえる場合はその後を“・ほか”, “et al”と略記する)。表題 (フルタイトルを記載)。雑誌名 発行年 (西暦); 巻: 頁-頁。

## 【単行本の場合】

著者名、表題、発行地: 発行所; 発行年 (西暦)。なお、引用が単行本の一部である場合には表題の次に編者名、単行本の表題を記し、発行年、頁-頁。他者の著作物の図表を論文中で使用する場合は、原著者 (あるいは団体) より投稿論文を電子公開することを含めた許諾が必要で、これを証明する書類を添付する。

## (8) 図・表・写真

## a. 図、表は英文で作成する。写真、図、表はPhoto。

1, Fig. 1, Table 1 などのようにそれぞれの番号をつけ, 簡単な英文のタイトルと説明を付記する.

- b. 本文中には写真, 図, 表の挿入すべき位置を明示する.
- c. 顕微鏡写真には倍率を付する. 光顕写真(細胞像, 組織像)の倍率は撮影時の対物レンズ倍率を用いるが, 写真へのスケールの挿入が好ましい. 電顕写真については撮影時の倍率を表示するか, または写真にスケールを入れる.

#### 5) 特集論文の様式

一つのテーマのもとに数編の論文(原著ないし総説)から構成される. 特集企画者は, 特集全体の表題(和文および英文)および特集の趣旨(前書きに相当)を1,200字以内にまとめる. 原稿の体裁は原著・総説に準じる.

#### 6) 読者の声

以上の学術論文に該当しないもので, 本誌掲載論文に関する意見, 本学会の運営や活動に関する意見, 臨床細胞学に関する意見を掲載する. ただし, 他に発表されていないものに限る. 投稿は以下の所定の書式・手順による.

- (1) 表題は和文50字以内とする. 表題に相当する英文も添える.

改行して本文を記述する.

末尾に著者名(資格も付記), 所属施設名, 同住所の和文および英文を各々別行に記す. 著者は1名を原則とする. 文献は文末に含めることができるが, 表・写真・図を用いることはできない. これらの全てを1,000字以内(A4判2頁以内)にまとめる.

- (2) 掲載の可否は編集委員会にて決定する. なお, 投稿内容に関連して当事者ないし第三者の意見の併載が必要であると本委員会が認めた場合には, 本委員会より該当者に執筆を依頼し, 併列して編集することがある.

#### 7) 英文投稿の場合

A4縦にダブルスペースで10頁以内とする.

和文抄録を付し, 図・表その他は和文の場合に準ずる.

### 5. 別 刷

別刷を希望するときは, 校正時に部数を明記して申し込む.

### 6. 論文の審査

投稿論文は編集委員会での審査により採否を決定し, その結果を筆頭著者に通知する. 審査にあたっては査読制をとる. 原稿の組体裁, 割付は編集委員会に一任する.

### 7. 校 正

著者校正は原則として初校において行う. 出版社から送付された校正は, 必ず3日以内に返送する. 校正担当者が筆頭著者以外の時は, 校正の責任者と送り先を投稿時に明記する. 校正では間違いを訂正する程度とし, 原稿にない加筆や訂正は行えない.

### 8. 掲 載 料

出来上がり4頁までを無料とし, 超過頁の掲載料は著者負担とする. 白黒写真製版代およびカラー写真印刷代は無料とするが, その他の図版費(図の製版代), 英文校正料, 別刷代は著者負担とする. また, 邦文論文の英文校正料と別刷代については半額免除とし, 英文論文の場合は図版費を含めて掲載料を免除する.

### 9. 依頼原稿

依頼原稿は, 総説または原著の形式とし, 査読を必要とせず, 著者校正を行う. 依頼原稿の著者は, 日本臨床細胞学会会員に限らない. 図・表・写真に関しては, 和文での作成を許容する. また掲載料に関しては全額免除とする.

### 10. 本規定の改定

投稿規定は改定することがある.

(平成4年6月一部改定)	(平成23年8月一部改定)
(平成6年6月一部改定)	(平成24年4月一部改定)
(平成9年6月一部改定)	(平成26年5月一部改定)
(平成11年6月一部改定)	(平成26年11月一部改定)
(平成21年5月一部改定)	(平成26年12月一部改定)
(平成21年6月一部改定)	(平成27年3月一部改定)
(平成21年11月一部改定)	(平成29年1月一部改定)
(平成22年4月一部改定)	(平成29年11月一部改定)
(平成22年9月一部改定)	(平成30年11月一部改定)
(平成23年3月一部改定)	(平成31年3月一部改定)

#### 添付1 Acta Cytologicaへの投稿について

投稿規定は [www.karger.com/acy](http://www.karger.com/acy) に明記されていますのでこれに従って下さい. 従来は国内での査読を行っていましたが, 直接投稿していただくことになりました.

#### 添付2 以下の2項目は毎年の1号に掲載する.

- ・ヘルシンキ宣言
- ・人を対象とする医学系研究に関する倫理指針  
平成26年12月22日  
平成29年2月28日一部改正

## 日本臨床細胞学会編集委員会 (令和元年~3年)

委員長: 矢納研二					
担当理事: 大平達夫	竹島信宏	三上芳喜			
委員: 伊藤以知郎	河原明彦	九島巳樹	黒川哲司	近藤英司	品川明子
田中良太	長尾俊孝	二村 梓	野村秀高	則松良明	廣川満良
古田則行	前田宜延	的田真紀	棟方 哲	柳井広之	
幹事: 大沼利通	西川 武				
査読委員: 青木裕志	明石京子	明瀬光里	秋葉 純	浅見志帆	阿部 仁
阿部彰子	阿部英二	安倍秀幸	新井正秀	荒木邦夫	有田茂実
有廣光司	有安早苗	五十嵐誠治	伊倉義弘	池上雅博	池田 聡
池田純一郎	池田徳彦	池畑浩一	池本理恵	伊古田勇人	石井真美
石岡伸一	石川雄一	石田和之	出馬晋二	磯西成治	井谷嘉男
市村友季	伊東恭子	伊藤崇彦	伊藤雅文	稲垣 宏	稲山嘉明
井野元智恵	今井 裕	今井律子	今野元博	今村好章	井村穰二
入江準二	岩崎雅宏	岩瀬春子	岩田 卓	岩屋啓一	上田 和
宇佐美知香	碓井宏和	白田実男	内田克典	内山智子	宇津木久仁子
梅澤 敬	浦野 誠	卜部理恵	卜部省悟	江口正信	蝦名康彦
遠藤浩之	小穴良保	及川洋恵	大石徹郎	大井恭代	大金直樹
大亀真一	大久保文彦	大崎博之	大崎能伸	大城 久	太田善夫
大谷 博	大塚重則	大沼利通	大野喜作	大橋隆治	大原 樹
大森真紀子	岡 輝明	小賀厚徳	岡田真也	緒方 衝	岡 俊郎
岡部義信	岡本 聡	岡本三四郎	岡本吉明	小倉 豪	小椋聖子
刑部光正	尾崎 敬	尾崎 聡	小田義直	小野里香織	小野瀬 亮
尾松公平	小山徹也	甲斐敬太	利部正裕	垣花昌俊	覚野綾子
笠井孝彦	笠松高弘	梶原直央	梶原 博	加勢宏明	片岡竜貴
片岡史夫	片山博徳	香月奈穂美	加戸伸明	加藤 拓	加藤一喜
加藤智美	加藤友康	門田球一	金尾祐之	金山清二	金山和樹
金子千之	鹿股直樹	神尾多喜浩	鴨井青龍	川崎 隆	川崎朋範
川瀬里衣子	川名 敬	河野光一郎	河野哲也	河原邦光	河村憲一
川村直樹	神田浩明	菊池 朗	木佐貫篤	岸野万伸	鬼島 宏
岸本浩次	北澤理子	北澤莊平	木下勇一	木村文一	喜友名正也
清川貴子	草苺宏有	草野弘宣	久慈志保	串田吉生	工藤明子
久布白兼行	熊木伸枝	久山佳代	黒瀬圭輔	黒田敬史	黒田直人
黒田 一	孝橋賢一	小材和浩	小島淳美	小塚祐司	小林佑介
小林裕明	小林博久	小林陽一	小宮山慎一	小山芳徳	近藤哲夫
近内勝幸	齋藤生朗	嵯峨 泰	坂谷貴司	坂本 優	佐川元保
桜井孝規	佐々木陽介	佐々木素子	笹野公伸	佐治晴哉	佐藤誠也
佐藤正和	佐藤美紀子	佐藤慎也	佐藤康晴	佐藤由紀子	郷久晴朗
澤田達男	塩澤 哲	澁木康雄	渋田秀美	澁谷 潔	渋谷信介
島田宗昭	島田啓司	清水和彦	清水 健	清水道生	清水禎彦
下釜達朗	白石泰三	菅井 有	須貝美佳	杉田好彦	杉山裕子
酒々井夏子	鈴木雅子	鈴木 淳	鈴木 直	鈴木正人	鈴木美和

関田信之	芹澤昭彦	園田顕三	駄阿勉	多比良朋希	高倉聡
高瀬頼妃	高田恭臣	高野忠夫	高野浩邦	高野政志	高橋顕雅
高橋芳久	高橋恵美子	鷹橋浩幸	高松潔	田口雅子	田口健一
竹井裕二	武田麻衣子	竹原和宏	田尻琢磨	橘啓盛	楯真一
田中京子	田中綾一	田中一朗	田中尚武	田中浩彦	棚田論
谷川輝美	谷口智子	谷山清己	田沼順一	田原紳一郎	玉手雅人
田丸淳一	千酌潤	塚田ひとみ	辻村亨	津田均	土田秀
筒井英光	角田肇	寺井義人	寺田倫子	寺畑信太郎	寺本典弘
寺本瑞絵	土居正知	田路英作	徳田雄治	渡具知克	徳永英樹
戸澤晃子	栃木直文	富永英一郎	豊田進司	鳥居貴代	内藤子来
内藤嘉紀	永井雄一郎	中泉明彦	中尾佳史	長阪一憲	長坂徹郎
中里宜正	中澤久美子	長嶋健	永瀬智	中塚伸一	仲村勝
中山富雄	中山宏文	中山淳	南部雅美	新倉仁	西川鑑
西川武	錦見恭子	西田直代	西野幸治	西村理恵子	西森誠
西山憲一	布引治	野澤真由	能登原憲司	野中道子	野村弘行
野本靖史	橋口真理子	長谷川清志	秦美暢	畑中一仁	服部学
馬場洋一郎	羽原利幸	濱川真治	林茂徳	林真也	林俊哲
原由紀子	原田憲一	坂東健次	阪埜浩司	東田太郎	東美智代
樋口佳代子	飛田陽	秀島克己	平沢晃	平田哲士	平林健一
廣井禎之	廣島健三	廣田誠一	福島万奈	福島裕子	福屋美奈子
藤井丈士	藤田茂樹	伏見博彰	藤山淳三	藤原寛行	二神真行
古田玲子	古旗淳	星利良	星田義彦	細根勝	堀江香代
堀由美子	彭為霞	前田純一	前田ゆかり	増田健太	増田しのぶ
町田知久	松井成明	松浦基樹	松澤こず恵	松下宏	松田育雄
松田勝也	松永徹	松林純	松本光司	松本慎二	松元隆
松山篤二	丸喜明	丸川活司	丸田淳子	三浦弘守	三浦弘之
水野美香	三橋暁	湊宏	南優子	南口早智子	三村明弘
宮井由美	宮城淳	三宅真司	三宅康之	宮崎龍彦	宮嶋葉子
宮本朋幸	村田晋一	村田哲也	望月紀英	元井亨	物部泰昌
森定徹	森下由紀雄	森康浩	森村豊	八重樫伸生	安岡弘直
安田政実	矢田直美	柳田聡	矢野恵子	矢野博久	山上亘
山口知彦	山口浩	山口倫	山崎奈緒子	山下博	山田隆司
山田隆	山田麻里沙	山田恭輔	山田鉄也	山田範幸	山元英崇
山本晃人	矢持淑子	横井豊治	横尾英明	横瀬智之	横山俊朗
吉岡治彦	吉田勤	吉田浩一	吉野潔	吉見直己	米田操
米山剛一	梁善光	和田直樹	渡部洋	渡邊純	渡辺寿美子
渡邊みか					

(50音順)

令和二年一月二十二日発行

編集兼  
発行人

公益社団法人  
日本臨床細胞学会  
代表者 矢納研二

〒100-1061 東京都千代田区神田駿河台二丁目一  
番一  
駿河台サンライズビル三階  
公益社団法人 日本臨床細胞学会  
発行所  
電話〇三(五七七)四六八〇 振替〇〇一〇一〇一三三五四五